

子ども達にホンモノの経験を！



久留島武彦記念館

推進大会の第3部では、久留島武彦記念館の館長、金成妍（キムソンヨン）さんをお招きし「無限の可能性はすぐそこに」という演題でお話いただきました。

金館長は、韓国釜山の生まれで語学研修のために日本に留学され、大学院で近代文学について学ばれました。恩師から手渡された本がきっかけで久留島武彦の研究を始め、博士号をとられたときの論文が、久留島武彦文化賞を受賞しました。受賞された時に「自分が勉強したものをこれからは社会のために貢献できるように頑張りたい」と語り、日本に残って研究活動を続けました。そして玖珠町から声がかかり、講演をする中、「玖珠町はなぜ童話の里なのですか」という問いかけに答えられない町民が多いことを知り、久留島武彦に特化した記念館を作るよう町民とともに要望し、7年間かけて開館を実現しました。

「日本のアンデルセン」と呼ばれた久留島武彦の教育は本物主義教育。金館長の住む湯布院の料理研究所の代表から「厨房でいくら練習しても良いレシピは生まれて来ない、いいものを見て、いいものを聞いて、教養を高めないと一流の仕事はできない」という言葉を聞いて、これこそが久留島教育だと思ったそうです。久留島武彦記念館は、開館から3年間、ストーリー性と本物にこだわった多様な企画を重ねてきました。子どもだからといって壊れにくいものや捨ててもいいものを与えるのではなく、子どもだからこそきちんと使い方を教えて、多様な本物を体験させることを大切にされています。

久留島武彦は玖珠町で9歳まで暮らした後、大分中学校で英語を学び、アメリカ人の先生から「人間を育てる人になりなさい」と言われ、14歳の頃から児童教育を目指しました。関西学院を卒業した後は、巖谷小波（いわや・さざなみ）に出会いアンデルセン童話を翻訳しながら童話執筆をはじめ、「すずむし」など多くの作品を生み出しました。この作品は、一生懸命頑張っても叶わないことはある、しかし頑張った結果は必ず何かの形で現れるというメッセージがあります。久留島武彦は生涯で140もの童話を残しています。久留島童話に共通するテーマは、「信じ合うこと」、「助け合うこと」、「違いを認め合うこと」です。



久留島武彦

また、久留島武彦は日本にボーイスカウトを紹介したことで知られますが、ジャンボリーに参加するためにデンマークに行った時は、地元の記者に働きかけてアンデルセンの偉大さを訴え、アンデルセンの博物館が建設されるきっかけをつくり、その後デンマークのメディアから「日本のアンデルセン」と報じられました。

児童文化という概念すら無かった時代に、口演童話を主な手段とした久留島武彦の活動は、教育の在り方としても画期的なものでした。一度もマイクを使ったことがないという久留島武彦の口演会場には一度に2万人が押し寄せたこともあり、70歳の年に460回、85歳の年に110回という驚異的な口演回数をこなし、「子供の未来はお話の中に」と、亡くなる二ヶ月前まで演壇に立ちました。生涯口演動員数は、正確に把握できた数だけで200万人を超えており、それは東京ドーム公演36回分に匹敵するといえます。

講演の最後は、久留島武彦の座右の銘「継続は力なり」について、「この言葉を、一人の男が身を持って実践した生き方を知ること、希望や勇気、そしてもう一度頑張ろうというやる気を呼び起こしてほしい」と締めくくりました。

「継続は力なり」一人の男の生き方に学ぶ